

巻 頭 言

創立125周年を迎えるに当たって

理事長代理 新 野 宏

日本気象学会は第4回国際極年（IPY：International Polar Year）の始まる今年の5月3日に、創立125周年を迎えます。この日を会員の皆様と共に祝いたいと思います。

理事会では2005年春から125周年記念事業準備委員会（2006年4月からは同実行委員会）を立ち上げ、記念行事の準備を進めてきました。5月の春季大会時には記念式典や記念シンポジウムを行うほか、気象集誌では記念レビュー特別号の刊行、「天気」では記念解説の連載、気象研究ノートではベテランの方々からの経験談やアドバイスを掲載した記念号の刊行等を行ないます。また、気象集誌と「天気」では第1巻からのpdfファイル化とインターネットによる公開を行い、いづどこにいても先輩諸氏の努力の足跡や数々の業績、含蓄のある解説などに瞬時に触れられるようになります。創立125周年を機に、是非とも気象学・大気科学が築き上げてきた奥深い体系と先達たちの努力に目を向け直し、自らの仕事をその中に位置づけると共に将来への構想を膨らませていただきたいと思います。

気象集誌第2輯第20巻（1942）によれば、当学会は第1回国際極年の始まる1882年に創立されました。創立当初は「東京気象学会」と称し、途中「大日本気象学会」と改称しましたが、1941年7月には文部省の認可を受け、同年8月11日に「社団法人日本気象学会」として活動を始めました。この間、雑誌の刊行さえも困難になるほどの苦境に何度か立たされたとのことで、125年間の長きにわたって学会活動を維持されてきた先輩諸氏の熱意とご努力に対して、深い敬意と感謝の気持ちを捧げずにはられません。

学会が創立された1882年は、近代的な気象力学の基礎を与える流体力学の世界において、粘性流体の運動を記述する Navier-Stokes の式が導かれてから37年後にあたります。後に Kelvin 卿と呼ばれるように

なった W. Thomson によるケルビンの循環定理、ケルビン波、ケルビン-ヘルムホルツ不安定など、新しい概念や現象が続々と提出されはじめた時期でした。その後の125年間には、気象力学・大気放射学・雲物理学など近代的な気象学・大気科学の基礎を支える諸分野の誕生と発展、地球環境科学を含むより幅広い大気科学へのめざましい発展がありました。大気科学の間口が広がったことは大変喜ばしいことですが、一方で、テーマの細分化と若手研究者の雇用条件の変化などにより、一部の研究者は目先のテーマに関わる論文をフォローすることに追われ、これまで積み上げられてきた気象学・大気科学の基本的な体系を把握する余裕がなくなっているようにも見えます。このため、来る3月の評議員会では、若手研究者の実力アップも含めて「学会として若手研究者にどのような支援ができるか」という議題を取り上げることとしています。

学問体系の継承の問題以外にも日本気象学会が抱える課題は少なくありません。災害や地球環境問題に関連して社会とどうかかわっていくか、さらには地球惑星科学連合との連携のあり方、日本気象学会と気象庁で包括的な共同研究契約を結ぶ気象研究コンソーシアム計画などの検討や、昨年成立した公益法人制度改革関連3法に対応して引き続き社団法人の認可を受ける準備を進めることも急務です。

このような課題が山積している中、昨年11月に木田秀次理事長が急逝されたことは日本気象学会にとって大きな悲しみでした。7月に第34期理事長に就任され、これまで温められてきた様々なアイデアをいざ実行に移されようとしていた矢先のことで、理事会のメンバーも新しい学会運営にご協力できることを楽しみにしていたところでした。心からご冥福をお祈りいたしますと共に、3月に新理事長が選任されるまでの間、理事全員で力を合わせ、学会の運営に支障がないように努めますこととお誓いする次第です。会員の皆様におかれましても学会運営に対する一層のご支援・ご協力をお願い申し上げます。